

児童の学習意欲に関する研究 (1)

—— 児童の学習意欲に及ぼす母親の養育態度の評価の効果 ——

今 林 俊 一

(1987年10月12日 受理)

A Study on Academic Achievement Motivation of Children (1)

—— Effects of Evaluations of Mother's Child-rearing Attitudes
on Children's Academic Achievement Motivation ——

Shunichi IMABAYASHI

1. 問題と目的

児童生徒の学業達成の面では、個々人の適性に合った教育プログラムの採用がこれまで強調されてきている。その適性には、児童生徒の知能や基礎学力、教師・友人・親との接し方、家庭や地域社会によって強化される慣習・態度に加えて、児童生徒自らの興味関心や動機づけ、目標に対する期待などが重要なものと考えられている。特に、児童生徒自らの興味関心や動機づけなどは、他の適性を十分に機能させようかどうかの働きを担うために、これまで、多くの研究がなされている。しかしながら、これまでは、目標追求に対して教師や親などから与えられる報酬や罰の差異の効果などを中心とし、興味や動機づけを外的な要因で操作しようとする研究が多かったのに対し、児童生徒自らの主体的な学習活動や学習意欲といった内的な要因を操作する研究は、多かつたとはいえない。このことについて、下山ら(1982¹⁸⁾)は、「個人に内在する動機を客観的に測定すること及び操作することの困難さ」と「用いられていることばのあいまいさや多義性」で説明している。

本研究は、教育の場で多用されている学習意欲をめぐる諸問題の解決を目指すという観点から、まず、学習意欲の規定因や発達・育成を検討しようとするものである。なお、学習意欲の概念については、達成動機づけの概念にかなり近いもので、教室での学習活動に関係する要因を加えたものとしている下山ら(1982¹⁸⁾)の考え方に準拠する。その考え方は、学習意欲の特性を、「自律性、自発性、価値志向性を重視する」ことから、暫定的な定義づけとして、「学習意欲とは、種々の動機の中から学習への動機を選択してこれを目標とする能動的意志活動を起こさせるもの」としている。

* 本研究の一部は、1987年日本教育心理学会第29回総会で発表した。
鹿児島大学教育学部心理学科

児童生徒の学習意欲や達成動機づけの発達や形成については、主に家族関係と密接な関係があるとされている (McClelland, 1961⁸⁾)。このことは、初期の親子関係に伴う感情的な要因が後の物の考え方や態度を規定するという理論的背景 (McClelland, 1961⁸⁾) と、また、自律訓練は達成動機の育成に貢献する (Winterbottom, 1958²³⁾) や高い達成欲求に関連する親の養育態度は卓越した基準の要求・あたたかさ・権威的でない態度などである (Rosen, 1959¹⁶⁾) などの実証的データに基づいている。これらのことから、達成動機づけや学習意欲は、環境的要因により育成されているといえよう。日本での追試研究では、前述の結果と必ずしも同じ結果は見出されていないが、親の養育態度と児童生徒の達成動機づけや学習意欲との間に有意な関連が認められており、達成動機づけや学習意欲の発達・形成になんらかの影響をそれらが及ぼしていることを示しているのである (林, 1967⁴⁾; 宮本, 1968⁹⁾; 奥野, 1968¹³⁾, 1973¹⁴⁾, 1978¹⁵⁾)。また、実際的な問題に関連性をもつ研究としての、幼児や児童の遊びに対する母親の態度と子どもの学習意欲 (中原, 1978a¹¹⁾, 1978b¹²⁾) や母親の子どもへの期待と子どもの達成動機 (前原, 1978⁷⁾) などにおいても、それぞれ関連が認められている。さらに、学習意欲を本研究の立場でとらえて、親の養育態度との検討を行っているものに、今林ら (1981⁶⁾)、遠藤 (1986¹¹⁾)、平川 (1987⁹⁾) などがある。その結果は、ほぼ一貫して、「親の保護的・服従的な養育態度のもとでは子どもの学習意欲は高い」、「親の支配的 (過剰期待) な養育態度のもとでは子どもの学習意欲は低い」とその関連性を報告している。

ところで、前述してきた研究は、親の側の要因としてとらえられる養育態度や認知像 (自己評価) の研究であるのに対して、児童生徒の親の養育態度に対する認知像 (他者評価) という児童生徒の側の要因の研究は、必ずしも多いとは言えない (山本ら, 1977²⁴⁾; 藤田ら, 1978²⁾; 藤田, 1978³⁾; 村山, 1979¹⁰⁾; 鈴木ら, 1980²¹⁾; 塚野, 1981²²⁾)。つまり、このことは、児童生徒が親に対してとる態度や反応の様相は、親が児童生徒に対して実際にとる養育態度によって規定されるよりむしろ、児童生徒が親の養育態度をどう認知 (評価) するかによって規定されるという親子相互交渉の視点からの研究方法論上の難しさが内包されていることを意味しているのであろう。しかしながら、この視点による研究は、親子相互交渉の中での児童生徒の行動変容のプロセスの理解だけでなく、児童生徒の欲求・動機といった情意面の理解や学習意欲をめぐる諸問題の解決にとっても必要かつ有効なものであろう。

これまで、親子相互交渉の視点に立った児童生徒の学習意欲の発達や形成の研究は、斎藤 (1981¹⁷⁾) による親の学業への期待についての子ども (中学生) 自身の認知の高さが子どもの学習意欲の高さと関連しているということや、平川 (1987⁹⁾) による親自ら見た養育態度よりも子どもからみた親の養育態度の方が学習意欲を規定する傾向にあるということなどが報告されているだけである。しかしながら、これまでの研究では、親の養育態度について、親子間の評価の違いによる児童生徒の学習意欲への影響は別々に検討されており、その評価の違いの影響を十分に反映しているとはいえないと思われる。

そこで、本研究では、児童の学習意欲の発達・形成を規定している要因の中で、親の養育態度、特

に、母親の養育態度について検討する。今回は、母親自身の養育態度の評価と子どもから見た母親の養育態度の評価それぞれを対応させ、その対応させた評価の一致・不一致などに基づいて5類型を構成し、各類型が児童の学習意欲に及ぼす影響について検討する。特に、以下の観点から、その影響を明らかにする。

(1) 母親の養育態度について、母親と児童間の評価がともに適応の型の児童とそれがともに不適応の型の児童の学習意欲の高低について。

(2) 母親の養育態度について、母親と児童間の評価に違いの見られる型の児童では、児童の評価が適応の型の児童とそれが不適応の型の児童の学習意欲の高低について。

2. 方 法

2.1. 被験者

鹿児島市内の小学校の3~4年生、計292名（男子147名、女子145名）とその母親（292名）。

2.2. 調査期日

1986年9月。

2.3. 調査場所

児童は、それぞれの教室において、担任教師が実施した。母親は、各家庭において実施した。

2.4. 調査材料

2.4.1. 学習意欲の質問紙

下山ら（1983¹⁹⁾の作成した学習意欲検査のGAMI（8要素40項目）を使用した。8要素は、「自主的学習態度」、「達成志向」、「責任感」、「従順性」、「自己評価」、「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」から構成されている。

2.4.2. 親子関係の質問紙

品川ら（1972²⁰⁾の作成したTK式診断的新親子関係検査（以下、親子関係検査）、親用・子用を使用した。この親子関係検査は、10領域（「不満」、「非難」、「厳格」、「期待」、「干渉」、「心配」、「溺愛」、「盲従」、「矛盾」、「不一致」）80項目から構成されている。

2.5. 手続き

学習意欲の質問紙は、児童の所属する教室内で担任教師によって実施した。質問紙の応答は、各項目に対して、「とてもよくあてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の4段階で評定させ、それぞれに、4・3・2・1点を与え

た。

親子関係の質問紙は、手引きの実施法に従って実施した。子用は、児童の所属する教室内で担任教師によって、強制速度法で行った。親用は、児童の各家庭において、母親が回答記入後、児童を通して、教室で担任教師が回収した。質問紙の応答は、各項目に対して、「ぴったりあてはまる」、「だいたいあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「ぜんぜんあてはまらない」の4段階で評定させ、母親の子どもに対する態度や扱い方の問題傾向の低い方から、4・3・2・1点を与えた。

2.6. 処理

学習意欲の得点として、各要素ごとの項目の合計得点、「P得点」、「N得点」および「総合得点」を求めた。「P得点」は、学習意欲の積極的・促進的側面を表わす5要素（「自主的学習態度」、「達成志向」、「責任感」、「従順性」、「自己評価」）の得点の合計であり、「N得点」は、学習意欲の消極的・抑制的側面を表わす3要素（「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」）の得点の合計である。「P得点」は、得点の高いことは促進傾向が高いことを、また、「N得点」は、得点の高いことは抑制傾向が高いことを意味している。「総合得点」は、「P得点」と「N得点」、すなわち、8要素の得点の合計である。ただし、「総合得点」の算出にあたっては、「N得点」を逆転して計算（75点-N得点）しているので、「総合得点」は、学習意欲の強さを示しているのである（「総合得点」=「P得点」+（75点-N得点））。

親子関係検査は、各領域ごとに合計得点を求めた。各領域とも合計得点が高くなるほどいろいろな種類の問題傾向は少なく、望ましい養育態度であることを意味している。また、母親の子どもに対する態度の適・不適については、各領域ごとの得点を、手引きの換算表（母用・子どもからみた母）の「危険地帯」（1～19パーセントイル）、「中間地帯」（20～49パーセントイル）、「安全地帯」（50～99パーセントイル）に基づいて群分けし、順に、「不適応群」、「中間群」、「適応群」とした。さらに、母親と児童間の母親の養育態度の評価の違いを類型化する視点として、母親の自己評価と子どもの親に対する受けとめ方とをとりあげた。すなわち、母親の自己評価の水準と子どもの親に対する受けとめ方の水準との関係から典型的類型化として、母親の自己評価と子どもの親に対する受けとめ方が、適応的で同水準のもの（「適応=適応群」）、母親の自己評価が不適応的で子どもの親に対する受けとめ方が適応的なもの（「不適応=適応群」）、母親の自己評価と子どもの親に対する受けとめ方が、要注意状態で同水準のもの（「中間=中間群」）、母親の自己評価が適応的で子どもの親に対する受けとめ方が不適応的なもの（「適応=不適応群」）、母親の自己評価と子どもの親に対する受けとめ方が、不適応的で同水準のもの（「不適応=不適応群」）の5類型の設定が可能である。なお、5類型の表示は、「母親の自己評価の結果=子どもの親に対する受けとめ方の結果」を意味している。

3. 結 果

表1～表10は、母親の養育態度の領域ごとに、母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。

表1は、「不満」（子どもとしっくりいかない、子どもに対して不満がある、ムシが好かない、他の兄弟と比較してかわいくない、無関心、他のことにとらわれて放っておく、相手にならないなどの母親の子どもに対する態度）における母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「責任感」、「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」、「N得点」、「総合得点」において、5類型間に有意な差が認められた（それぞれ、 $F_0=3.09, 3.94, 6.44,$

表1 「不満」における母子間の評価と学習意欲
（上段：平均値，下段：標準偏差値）

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	12.45 3.24	13.27 3.55	12.32 2.15	13.50 2.56	13.25 3.02	
達成志向	15.18 3.95	13.83 3.09	13.68 2.70	14.38 2.07	14.90 2.97	
責任感	15.09 2.59	15.83 2.23	15.16 2.25	14.50 2.39	16.27 1.93	F=3.09 *
従順性	14.27 2.28	15.57 2.87	15.20 2.81	14.75 2.49	15.41 3.00	
自己評価	14.36 3.23	13.87 2.62	14.52 2.29	14.13 2.36	14.74 2.65	
失敗回避傾向	11.18 2.04	11.93 2.92	11.36 2.51	9.38 3.16	10.07 2.75	F=3.94 **
持続性の欠如	13.45 2.42	12.90 3.13	12.36 1.78	13.00 3.25	10.81 2.80	F=6.44 ***
学習価値観の欠如	11.82 2.86	9.83 3.17	9.76 3.17	9.13 4.09	8.67 2.44	F=4.25 **
P得点	71.36 12.45	72.37 11.71	70.88 9.07	71.25 8.60	74.56 9.96	
N得点	36.45 6.25	34.67 7.42	33.48 5.13	31.50 9.12	29.55 6.42	F=6.56 ***
総合得点	109.91 15.25	112.70 16.56	112.40 10.49	114.75 15.72	120.02 13.22	F=3.70 **
人 数	11	30	25	8	121	195

+ p<0.10
* p<0.05
** p<0.01
*** p<0.001
(df=4,190)

表2 「非難」における母子間の評価と学習意欲
(上段: 平均値, 下段: 標準偏差値)

母親 子供	不適応 不適応	適 応 不適応	中 間 中 間	不適応 適 応	適 応 適 応	有 意 水 準
自主的学習態度	12.18 3.09	13.04 3.54	11.71 2.70	13.08 3.12	13.58 3.10	F=2.43 *
達成志向	14.45 2.81	14.08 3.06	13.44 3.29	14.77 1.92	14.92 2.81	
責任感	15.18 1.60	16.04 1.97	15.32 2.85	16.08 1.66	16.35 2.02	
従順性	13.82 4.29	15.38 2.84	14.35 3.19	15.15 2.15	16.07 2.40	F=3.39 *
自己評価	13.64 2.29	14.38 2.65	14.06 2.88	15.15 1.77	14.64 2.60	
失敗回避傾向	11.18 3.16	12.46 2.77	10.44 2.70	9.85 1.68	10.02 2.88	F=4.22 **
持続性の欠如	14.00 2.57	13.00 2.99	12.53 2.15	11.15 2.04	11.06 3.15	F=4.97 ***
学習価値観の欠如	11.73 4.41	10.00 2.64	9.68 2.70	8.23 2.35	8.83 2.59	F=3.86 **
P 得点	69.27 9.47	72.92 10.65	68.88 12.45	74.23 7.12	75.56 9.54	F=3.11 *
N 得点	36.91 8.64	35.46 6.10	32.65 5.10	29.23 4.09	29.91 6.86	F=6.44 ***
総合得点	107.36 17.63	112.46 12.28	111.24 14.44	120.00 9.93	120.65 13.87	F=5.17 ***
人 数	11	26	34	13	86	170

+ $p < 0.10$ * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

(df=4,165)

4.25, 6.56, 3.70; $p < 0.05, 0.01, 0.001, 0.01, 0.001, 0.01$; 全て, $df=4,190$)。また, 有意な差の認められた要素において, ライヤン法による平均対の比較を行った結果, 以下の類型間に有意差(5%水準)が認められた。

「失敗回避傾向」: 「適応=不適応群(以下, B群)」> 「適応=適応群(以下, E群)」。

「持続性の欠如」: 「不適応=不適応群(以下, A群)」> E群, B群>E群。

「学習価値観の欠如」: A群>E群。

「N得点」: A群>E群, B群>E群, 「中間=中間群(以下, C群)」>E群。

表2は, 「非難」(子どもをおどかしたり, 悪くいたり, 体罰やその他の罰を与えたり, どなりつけたり, 出ていけといたりなどの母親の子どもに対する荒っぽい態度)における母親と児童間

の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「自主的学習態度」、「従順性」、「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」、「P得点」、「N得点」、「総合得点」において、5類型間に有意な差が認められた（それぞれ、 $F_0=2.43, 3.39, 4.22, 4.97, 3.86, 3.11, 6.44, 5.17$; $p<0.05, 0.05, 0.01, 0.001, 0.01, 0.05, 0.001, 0.001$; 全て、 $df=4,165$ ）。また、有意な差の認められた要素において、ライマン法による平均対の比較を行った結果、以下の類型間に有意差（5%水準）が認められた。

「自主的学習態度」：C群<E群。

「従順性」：A群<E群，C群<E群。

「失敗回避傾向」：B群>C群，B群>「不適応=適応群（以下，D群）」，B群>E群。

「持続性の欠如」：A群>E群，B群>E群。

「学習価値観の欠如」：A群>D群，A群>E群。

「P得点」：C群<E群。

「N得点」：A群>D群，A群>E群，B群>D群，B群>E群。

「総合得点」：A群<E群，C群<E群。

表3は、「厳格」（子どもの気持ちにかまわず、一方的に親の考えている枠に押し込もうとしそれから逃げることを許さない。常に子どもを監督下におき、きびしい命令と禁止でしぼるなどの母親の子どもに対する態度）における母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「従順性」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」、「P得点」、「N得点」、「総合得点」において、5類型間に有意な差が認められた（それぞれ、 $F_0=4.01, 4.25, 5.21, 2.27, 5.16, 3.52$; $p<0.01, 0.01, 0.001, 0.10, 0.001, 0.01$; 全て、 $df=4,155$ ）。また、有意な差の認められた要素において、ライマン法による平均対の比較を行った結果、以下の類型間に有意差（5%水準）が認められた。

「従順性」：A群<E群，D群<E群。

「持続性の欠如」：A群>D群，A群>E群。

「学習価値観の欠如」：A群>D群，A群>E群。

「P得点」：A群<E群。

「N得点」：A群>D群，A群>E群。

「総合得点」：A群<E群。

表4は、「期待」（子どもに対して高い期待をかけ、子どもの能力や気持ちにかまわず親の希望する方向へ引っぱっていくなどの母親の態度）における母親と児童間の評価の5類型と学習意欲の得点との関係を示したものである。その結果、「達成志向」、「責任感」、「従順性」、「失敗回避傾向」、「持続性の欠如」、「学習価値観の欠如」、「P得点」、「N得点」、「総合得点」において、5類型間に有意な差が認められた（それぞれ、 $F_0=2.04, 2.96, 2.92, 2.25, 4.10, 4.01, 2.06, 5.61, 3.90$; $p<0.10, 0.05, 0.05, 0.10, 0.01, 0.01, 0.10, 0.001, 0.01$; 全て、 $df=4,162$ ）。また、有意な差の認められた要素において、

